講座 源氏物語の世界

秋山 虔・木村正中・清水好子 編

源氏物語の世界

第二集

若紫巻～花宴巻

虔・木村正中・清水好子 編

有斐閣

編者紹介

秋山　虔（東京大学文学部教授）

木村正中（学習院大学文学部教授）

清水好子（関西大学文学部教授）

講座　源氏物語の世界〈第二集〉

昭和55年10月1日　初版第1刷印刷
昭和55年10月10日　初版第1刷発行

定価 1,800円

編者　秋山　虔
　　木村正中
　　清水好子

発行者　江草忠允

発行所　株式会社 有斐閣

東京都千代田区神田神保町2～17
電話　東京（264）1311（大代表）
郵便番号〔101〕振替口座東京6-370番
本郷支店〔113〕文京区東京大学正門前
京都支店〔606〕左京区田中門前町44

印刷　株式会社三陽社・製本　株式会社高陽堂

© 1980, 秋山虔・木村正中・清水好子. Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

1393-071020-8611

はしがき

『源氏物語』は、『万葉集』と並んで、日本人の心の中に、永く生きつづけ、近代の文学にも大きな影響を与えている古典中の古典である。まさに日本人の心の故郷ともいうべき世界がここにある。

さて、その『源氏物語』の研究も、平安時代以来長い伝統をもち、その積み重ねの上に、今日では多彩をきわめており、なお、つねに新しい課題が取り出されて、尽きることがない。すなわち、成立論・構想論、あるいは作品成立の歴史的背景の解明や準拠論、作品の内在的展開に重点を置いた主題論・構造論、さらに表現論・文体論、とくに「語り」や草子地の問題、また作品に内包される諸種の思想の追究、王権論・神話的構造論など。それは、この作品がもつ無尽蔵の内在的意義と、複雑な機構とを考えれば当然であろう。

一方、このような作品総体を対象とする研究とともに、注釈的研究の発展も著しい。注釈的研究は、もはや単なる平板な訓詁の学で終わることができない段階に達しており、叙述に正確に即しながら、個々の部分に内蔵される文学的意味を明らかにしていく方法が要請されているのである。こうした、各巻の内部からの問題点の把握が、作品の総体的な考究と深くかかわりあっていることはいうまでもない。つまり、『源氏物語』の個々の局面の「読み」の中から導き出された視点を、作品総体との連関において確認し、それによって『源氏物語』の展開をいっそう明確に跡づける、――こうした反覆作業が『源氏物語』の理解をさらに深めていくわけである。『源氏物語』を「読む」とは、要するに、

さまざまな視点からの作品分析を相互に媒介させながら、いま読みつつある部分に内在する特有な作品論的意義を具体的に明らかにし、『源氏物語』の本質に近づいていくということなのであろう。

この『講座　源氏物語の世界』は、右のような『源氏物語』の「読み」を実現したものである。巻の順序に一応従い、その巻をめぐって存在する主な「テーマ」を取り出した。それらは、巻固有の場面的ないし巻論的な方向、他の巻と密接に関連していく構想論的方向、時には全体にかかわる美意識の問題などの考究として、また物語に外在する背景的な諸要件をその基盤として捉えることによって問題を明らかにしていく方向へと、それぞれの「テーマ」の性格に応じた方法をもって究明されている。これらの「テーマ」の追求が、〝『源氏物語』とは何か〟の問いにこたえ、さらに、この物語を読むための具体的な手がかりともなれば、まことに幸いである。

なお、「テーマ」は、従来の研究の達成の中から、編者三人が設定し、それにもとづいて、数多くの執筆者に自由に論究していただいた。また、各集には、『源氏物語』に深い関心をもっておられる方々に、より広い角度からのエッセイを寄せていただいた。これらの方々の御協力に深く感謝する次第である。また、いろいろとお世話になった有斐閣編集部の澤井洋紀・林喜代子両氏に厚く感謝の意を表したい。

編者　秋山　虔
木村正中
清水好子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

〔若紫巻〕
1 北山の春　小町谷照彦　1
北山のなにがし寺　くらま山とくらぶ山　山辺の花　北山の人々

〔若紫巻〕
2 若紫巻と『伊勢物語』　中田武司　21
若紫巻の問題　若紫巻中の二つの歌群　物語展開の類似性　藤壺の宮との秘事と『伊勢物語』　紫の上の強奪と「武蔵野の心」　昔男と「源氏の君」　親子の情

〔若紫巻〕
3 光源氏と聖徳太子信仰　堀内秀晃　35
『聖徳太子伝暦』の成立　『伝暦』の作者　高麗人の観相と『伝暦』　聖徳太子の数珠　日本の末の世

〔若紫巻〕
4 紫の上の発見——紫の上論(1)　南波　浩　45
若紫巻始発説に関連して　紫の上の発見　影から形へ　『伊勢物語』との関係　紫のゆかり　若紫引きとり　藤壺懐妊の意味　若紫の行方

〔若紫巻〕
5 継子物語の系譜　神野藤昭夫　65
継子物語としての紫の上の物語　『源氏物語』以前の「継母・継子」　継子物語群の展望　継子物語流行の謎　物語文学としての継子物語　若紫巻の継子物語構造

〔若紫巻〕
6 女としての藤壺　石田穣二　77
先帝の四の宮　桐壺から若紫へ　藤壺の存在の意味　密通の場面　賢木巻の描写　藤壺の懐妊　「宿世」について　女としての藤壺　密通の構図

〔若紫巻〕
7 若紫巻の成立　池田和臣　97
成立論の展開と成果　起筆の巻は若紫か　若紫と帚木三帖　若紫と桐壺　若紫と長編構想　まとめとして

〔末摘花巻〕
8 しこめの物語——神話的幻想の世界から　小林茂美　112
〝もどき〟の仕組　二律背反の統一像　表と陰の演出者　「沈黙の女」と仮面性と
「蓬生の宿」の神話的原風景　〝他界の生類〟のイメージ　他界身・「ひたち」　〝拷り〟
と〝救いの世界〟　食膳のテーマと黄泉の国の醜悪相　〝変身〟の論理と醜女の原像
石長姫伝承から　スケープ・ゴート

〔末摘花巻〕
9 末摘花巻の方法　藤井貞和　132
末摘花姫君の出自　女主人公としての末摘花　女性遍歴の一階梯　かいま見・見ること
との欠如　結婚　貧しさとその中心、故父の霊　紫の君と末摘花と

〔紅葉賀巻・花宴巻〕
10 賀宴と花宴　山本利達　149
巻名　紅葉賀は賀宴　朱雀院　紅葉賀の准拠　試楽　加階　花宴の准拠　南
殿の花宴　聖代

11 花と紅葉の美　新井栄蔵　168
花の都パリ　あこがれの花、散りしく紅葉　春の花・秋の紅葉　春秋合せ、すなわち、

春の花・秋の紅葉の競い合せ　花紅葉　四季一般の景物を代表する「花紅葉」　はかなさをいう「花紅葉」　『源氏物語』以後の「花紅葉」

〔紅葉賀巻〕
12 公人と私情——光源氏論(3)　鈴木日出男　182
不義の皇子の誕生　桐壺帝の意思　光源氏と藤壺　光源氏の辯　恋と権勢

〔紅葉賀巻〕
13 冷泉院誕生　深沢三千男　199
光源氏の聖性と高麗人予言　乱愛と父帝の対処——運命観とのかかわりで　源氏王権の論理　王権と愛と母の世界　冷泉院誕生

〔紅葉賀巻〕
14 源典侍の物語　三谷邦明　212
出発点　紅葉賀の構成　物語の響鳴　閨からの声　源典侍の人物造型　〈老女〉と〈好色〉——藤壺事件との関わり　紅葉賀巻と花宴巻——朧月夜事件との関わり　源典侍物語の位相

〔花宴巻〕

15 朧月夜に似るものぞなき　清水好子　236

出会いの場面　花の宴——出会いの日　本意の人藤壺　細殿の三の口——出会いの場
若うをかしげなる声　朧月夜の女君　らうたき女　右大臣の姫君　二条の后の面影

16 月の美　林田孝和　256

夜の心象風景　月光設定の三つの型　月の宴　月夜の霊と物怪と　月下の交情
月待つ女の物語

〔源氏物語と私〕

源氏物語とのつきあい（109）——松尾聡

物語の幸福（234）——野島秀勝

全九集総目次

テキスト対照表

若紫巻

1 北山の春

小町谷照彦

北山のなにがし寺

「若紫」の巻頭、一八歳の春、光源氏は瘧にかかっている。この病気が帝の寵児で、窮屈な人間関係でがんじがらめになっている貴公子光源氏を、都の生活から解放して北山におもむかせ、宿命の人紫の上とめぐり合わせるという、光源氏の生涯を支配する運命的な事件を導き出すことになる。光源氏が北山におもむくまでの経緯は、一つの必然としてきわめて滑らかな形で描かれている。

瘧病にわづらひたまひて、よろづにまじなひ、加持などまゐらせたまへど、しるしなくて、あまたたびおこりたまひければ、ある人、「北山になむ、なにがし寺といふ所に、かしこき行ひ人はべる。去年の夏も世におこりて、人々まじなひわづらひしを、やがてとどむるたぐひあまたはべ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

りき。ししこらかしつる時はうたてはべるを、疾くこそこころみさせたまはめ」など聞ゆれば、召しに遣はしたるに、僧「老いかがまりて室の外にもまかでず」と申したれば、光源氏「いかがはせむ。いと忍びてものせむ」とのたまひて、御供に睦しき四五人ばかりして、まだ暁におはす。

（引用は『全集』による以下同。(1)二七三頁）

光源氏が病気になる、あれこれ加持祈禱を試みても効果がない、ある人が効験あらたかな北山の聖の治療を受けることを勧める、こじらしてはいけないとさっそく召しに遣る、聖は年老いて京へ出て来れない、やむなく光源氏自身が北山におもむくことになる、といった展開になっている。光源氏は、新しい物語の進展の舞台としてふさわしい北山のなにがし寺という異空間に、必然的な場面設定によってみずから入り込んでいくのである。

この北山のなにがし寺は、『河海抄』に「此の寺鞍馬寺か。昔は四十九院ありけり。仏法盛地なり云々。河原院をなにがしの院といふ同躰なり。……鞍馬のつづらをり、清少納言枕草子に見えたり」と記されてから、『細流抄』『孟津抄』『岷江入楚』『湖月抄』など古注に受け継がれ、『源注拾遺』の「北山といふ所もあれど、これは北の方なる山なり」、広道の『評釈』の「旧注に北山のなにがし寺を鞍馬寺として准拠多く挙げられたれど、例の用なければ引き出でず。ただそのあたりの事とのみ見てあるべし」などといった合理主義的な准拠否定説も見られるが、『新釈』の「鞍馬寺にあてたり」、吉田東伍の『大日本地名辞書』の「溟滝は寺門の内に在り。源氏物語に見ゆ。わらは病したまふに、鞍

馬山に有験の聖おはすとて参籠したまふ時　源氏　吹きまよふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな」などというように、新注以後も鞍馬寺准拠説が有力に主張されてきた。だが近年になって准拠説に新たな展開が見られ、興味深い説が次々と発表されるようになった。

その一つは、大井重二郎氏の「源氏『若紫』の北山の位置」（『平安文学研究』第三〇輯、昭38・6）で、興隆寺・霊岩寺・高岑寺などの寺があった鷹峯の地をそれと想定するもので、当時の史書や『今昔物語集』などに北山の呼称で記されている鷹峯の寺院、『文華秀麗集』や『本朝文粋』『本朝無題詩』などに収められている北山に因む詩文、朝廷の御燈の行事などとの密接な関連、巨岩の存する景観などから、霊岩寺や高岑寺が「若紫」の舞台として相応する地であると考証された論考であり、蓋然性を指摘されたものだが、きわめて示唆に富んでいる。次は角田文衛氏の「北山の『なにがし寺』」（『若紫抄』昭43）で、『源氏物語』の叙述に適う一一の条件を挙げ、さらに「それは、紫式部の一族と何等かの縁があり、それで彼女が一再ならず参詣した寺院である」という条件を付け加えて、岩倉の大雲寺を想定しておられる。大雲寺は紫式部の母方の曾祖父藤原文範の本願で、女婿の真覚（村上天皇の崩御を悲しみ、夫婦ともに出家。『蜻蛉日記』康保四年七月条など）を開基として、文範の小野山庄の一角に天禄年間（九七〇～一）に創建された寺院で、智証門徒の余慶、その高弟勝算、空也から余慶に託された反故聖義観、大内記の聖寂心（慶滋保胤）らがおり、紫式部も血縁関係からしばしば参詣し、その景観は強く印象に刻みつけられ、これらの高僧たちから大きな感銘を与えられ、「若紫」の舞台設定に少なからぬ暗示を得ていたのではないかというのである。史学の造詣に裏付けられたこの角田氏の大

雲寺説は、中村真一郎氏の『古寺発掘』（昭47。中公文庫、昭55）に受け継がれ、「大雲寺　光源氏と若紫ゆかりの」という克明な文学散歩の記事となっている。もう一つは、淵江文也氏の「『ふるごと』と源氏物語の新美質――諸注拾遺として」（紫式部学会編『源氏物語と和歌　研究と資料』昭49）で、これはなにがし僧都の人物造型に着目することから出発した論考であり、身分が高くて妹尼を養育しているという『源氏物語』の記述から、朱雀帝の弟で冷泉帝の父にあたる光源氏の人物設定を史実の皇胤譜に当てはめて、村上帝としてその従兄弟の寛忠僧都をなにがし僧都と想定して、寛忠の居住していた仁和寺から北山を葛野郡大北山の一角に当たる龍安寺や仁和寺の背山の大内山や円融寺の背山の村上御陵山辺とされるものである。北山の聖についても、「仁和寺系高僧の援助を得てその背山やゝ深く入る辺で岩陰に庵して即身仏を期する真言系聖の俤で作者は描いているらしい」と言っておられる。場所からでなく人物から出発するという斬新な着想が興深い結論に到達している。鷹峯、岩倉、仁和寺背山とさまざまな結果を導き出している推論はそれぞれに魅力的な説得性があり、その中のいずれか一つを採るというよりもむしろそれぞれが何らかの形で「若紫」の「北山」の形成にかかわっているというように今の所は考えておきたい。古注の鞍馬寺説も歌語としての造型力という点から一概に捨て去りがたく、ここでは和歌の面から鞍馬寺説をもう少しなぞってみたいと思う。

くらま山とくらぶ山

三代集で「北山」と詞書する歌を求めると、「雲林院（うりんいん）の親王（みこ）のもとに、花見に北山のほとりにまかれりける時によめる　いざ今日は春の山辺にまじりなむ暮れなばなげの花の蔭かは」（『古今集』春上・

九五・素性)、「北山に紅葉折らむとてまかれりける時によめる　見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」(同秋下・二九七・紀貫之)、「北山に僧正遍照と茸狩にまかれりけるによめる　紅葉ばは袖にこき入れて持て出でなむ秋は限りと見む人のため」(同三〇九・素性)、「十月ばかりおもしろかりし所なればとて、北山のほとりにこれかれ遊び侍りけるついでに　思ひ出でて来つるもしるく紅葉ばの色は昔に変らざりけり」(『後撰集』雑四・一三〇二・藤原兼輔)、「同じ心を　峰高み行きても見べき紅葉ばをわが居ながらもかざしつるかな」(同一三〇三・坂上是則)の五例が挙げられ、「北山は鹿園寺の辺をおしなべて言ふ。平野の北に大北山小北山とて村もあり。……都の北鞍馬の辺をさして言へるにはあらず」と『余材抄』に言っているように、これらの「北山」は金閣寺のある衣笠山のあたりと見るのが通説だが、「北山」の地がいかに「花」や「紅葉」と結び付いているかがうかがい知られる。時代は下がるが、『露色随詠集』に「北山や西山野辺の花見にとさてすみぬべき谷もたづねむ」という歌があり、北に山を背負い南に川が地を区切って流れる平安京の風土では、花紅葉を楽しむ行楽の地として「北山」という呼称は独特な印象を与えるものであったと思われる。その「北山」を代表する典型的な地が鞍馬である。

岡崎知子氏の「平安朝女性の物詣」(『平安朝女流作家の研究』昭42)に収められた『枕草子』や女流日記、私家集などを資料とした当時の女性たちの物詣の行先を整理した一覧表によると、初瀬一五例、石山一四例、清水一二例、賀茂一〇例、法輪八例、鞍馬八例、稲荷四例、太秦三例、貴船三例といった順になっている。この数字が参詣の頻度をそのまま示すものではないにしても、おおよその傾向を

うかがい知る目安にはなろう。御形宣旨、赤染衛門、清少納言、菅原孝標女といった女性たちが鞍馬へ皆参詣しているのである。たとえば、『御形宣旨集』は二十首足らずの小歌集だが、全体が鞍馬詣紀行といった体裁となっており、流布本『赤染衛門集』では、「鞍馬に詣でしに、貴船に御幣奉らせしほどに、いと暗うなりしかば」、「鞍馬にて月の明かかりしに」「鞍馬にて衣の滝といふ所を」「四月一日、鞍馬に詣でたりしに、鶯の鳴きしを」「二月に鞍馬に詣でしに、岩間の水白く湧きかへりたるが、雪のやうに見えしに」とあり、「仏法僧と鳴く鳥を聞きて」も異本に「鞍馬にて」と記されているので、鞍馬詣の歌六例を挙げることができる（『私家集大成』中古Ⅱの「赤染衛門集」Ⅰで番号を示すと、一三七・二六〇・二六一・三八九・四一四・四八八。前掲の岡崎氏の調査では四例となっている）。また、孝標女は「山際霞みわたり、のどやかなるに、山の方よりわずかに野老など掘りもて来るもをかし」「山の端、錦を広げたるやうなり。たぎりて流れゆく水、水晶を散らすやうにわきかへるなど、いづれにもすぐれたる。……かきしぐれたる紅葉のたぐひなくぞ見ゆるや」（『更級日記』）と春秋の鞍馬の情趣深い景色を記している。このように鞍馬は「北山」の聖地として季節の情景と深くかかわり合いながら王朝の人人の脳裏に強く刻みつけられているのであり、『枕草子』「近うて遠きもの」の「鞍馬のつづら折りといふ道」も鞍馬でなければ印象が浮ばないといった、ぬきさしならない結び付きがあるように思われるのである。「若紫」の「北山」は勿論鞍馬そのものではないが、その舞台設定に鞍馬の印象が何らかの形でかかわっていることを一概に否定できない気もする。近年の准拠説に合理的な説得性を認めながらも、旧注以来の「鞍馬」という地名の持つ語としての魅力にどうも傾斜していかざるを得ない

のである。花紅葉の美しい地としての「北山」、信仰の対象の聖地としての「鞍馬」、それはまた歌語としての歌枕的な地名であり、「北山のなにがし寺」はそのような言葉の表現性の上に成り立った言語的な時空なのである。

歌語としての「鞍馬」はクラという音を持った名前からの掛詞的な連想によって、暗いとか闇とか黒とか夜とかいった印象がある。暗くて頼りなげな感じは「おぼつかなし」「たどる」とかいった言葉を伴って用いられ、夜深くおぼつかない声でたどたどしく鳴く「時鳥」が景物となり、「墨染めの」「五月闇」「下つ闇」などの枕詞に導かれる。

墨染めの鞍馬の山に入る人はたどるたどるも帰り来ななむ（『後撰集』恋四・八三三・平中興女）

おぼつかな鞍馬の山の道知らで霞の中に惑ふ今日かな（『拾遺集』雑春・一〇一五・安法法師）

五月闇鞍馬の山の時鳥おぼつかなしや夜半の一声（『清正集』）

鞍馬山おぼつかなしと人問はば名にはたがへる道と答へむ（『馬内侍集』）

下つ闇鞍馬の山の時鳥たどるたどるぞ鳴き渡るなる（『道命阿闍梨集』）

このように「鞍馬」＝「暗」から出発した連想による言葉の体系が見事に成立しているのである。「名に高き鞍馬の山を来てみれば法留めたる所なりけり」（『道命阿闍梨集』）は聖地鞍馬をうたったものだが、「鞍」「乗り」の縁語関係を読みとることもできよう。鞍馬の「桜」については、「これやこの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.